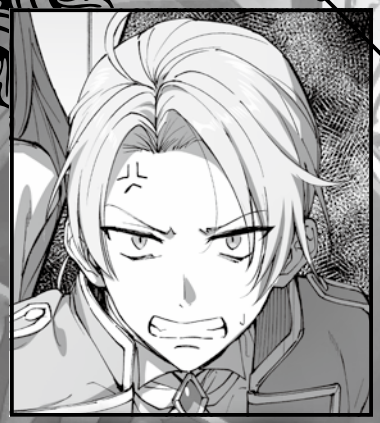
王命って何ですか？

～虐げられ才女は理不尽な我慢をやめることにした～

Characters

ロザリア・アルジール

国一番の大富豪である
アルジール伯爵家の令嬢。
王命により、
婚約者と引き裂かれ
ウィンダリア侯爵家に
嫁いだものの、
理不尽な扱いを受けて――？

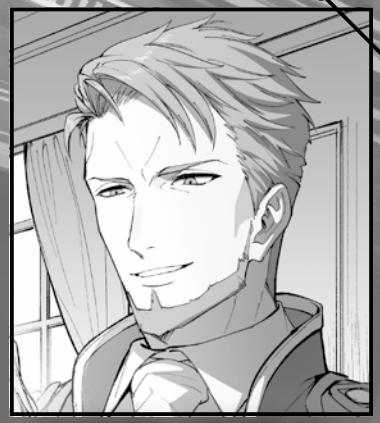


シグナス・ウィンダリア

現ウィンダリア侯爵で
ロザリアの元夫。
妻として迎え入れたロザリアを
別邸に追いやり虐げていた。

リヒテル・シュバイツァー

側妃の息子である王太子。
ウィンダリア侯爵家を訴え出た
アルジール伯爵家に対し
協力的だが、その思惑は――？



スペンサー・アルジール

現アルジール伯爵でロザリアの父親。
自らの才覚で商会を
国一番のものにした、
やり手の商人。

ベアトリス・ビアリー

ビアリー伯爵家の令嬢で
シグナスの愛人。
ウィンダリア侯爵家ではロザリアを
差しおいて『奥様』と呼ばれていた。

第一章

マーカス大陸の東の海に面する海洋国家シュバイツァー王国。
その王都マルナスは、海がもたらす温暖な気候と豊かな海産物資源、そして周辺国に先駆け、港湾整備に着手したことにより貿易の中継拠点として繁栄し、いたるところで活気と賑わいを見せていた。
本日そのマルナスで、後の世で『王命裁判』と呼ばれることになる、この国の行く末を左右するとでもいうべき、注目の裁判の幕が切って落とされようとしていた。
そのため、朝から貴族裁判所前には、裁判を一目見ようと多くの貴族達が詰めかけ、数少ない傍聴券を求め長い行列を作っている。
さて、ではなぜこの裁判が、これ程までに貴族たちの注目を集めるのか？
それは被告側、原告側、それぞれが持つ特異性にあった。
まず、被告側――訴えられたのは、現国王陛下の妹王女の嫁ぎ先でもある、建国以来から続く由緒正しき名門貴族ウィンダリア侯爵家。
そして原告側――訴えたのは、他国との貿易を生業にしてのし上がり、国への貢献度の高さから

叙爵された、平民上がりの新興貴族であるアルジール伯爵家。
余談だが、このアルジール家の経営する商会は、今では国一番の売上を誇り、まさしく国の経済を牛耳る存在と言っても過言ではないだろう。
名門貴族対新興貴族。同じ貴族とはいえ全く正反対の立場を持つこの二家による諍いが、貴族達の関心を集めないはずがない。
おそらく明日の貴族新聞の一面を飾るであろう、この裁判。
裁判冒頭、証言台に立ったのは原告側であるアルジール伯爵家の長女ロザリアだった。
彼女は裁判長に向かい涙ながらに訴えた。
「元夫シグナス様に嫁ぐ前、私には婚約者がいました」
……と。そして、こうも続けた。
「私は彼を心から愛していました。でも……私とその方との婚約は破棄され、私はシグナス様の下へと嫁ぎ侯爵夫人となったのです。そう……。王命という誰も覆すことの出来ない理不尽な制度によって……」
裁判開始早々、王命を理不尽だと公衆の面前で公言した彼女。
裁判での証言でなければ不敬罪に問われ、罰せられてもおかしくはない発言だ。
貴族にとって、この王命という言葉はそれほどまでに重い。
だが彼女はそれを全て承知の上で、あえてこの言葉を選んだのだ。理不尽だと……
実はロザリアはこれより少し前、侯爵家から彼女の有責で離縁されている。原因は彼女の不貞行

為だ。
今回の裁判はそれを否定し、彼女の身の潔白を証明するために起こされたものだった。
「ですが、理不尽な結婚には理不尽な扱いが待っていました。王命は私を守ってはくれませんでした。侯爵夫人なんて名ばかり。私は嫁いだその日から、別邸と呼ばれる建物に閉じ込められ、家族に会いに行くことさえ許されませんでした。嫁いでからの三年間、ただの一度もです」
ロザリアの言葉を聞いた傍聴人たちは息をのんだ。
「……三年間、ただの一度も？」
彼らは顔を見合わせながら、彼女の発したその言葉にさざめきあう。
「それだけではありません。いざ侯爵家に嫁いでみれば、本宅には使用人達から奥様と呼ばれている女性が既にいらっしゃったのです。不貞を働いていたのは私ではありません。元夫シグナス様の方です。お相手はビアリー伯爵家の令嬢ベアトリス様。ビアリー家は侯爵家同様、建国時から続く名家です。調べて頂ければすぐに分かるかと思います」
彼女は証言台で、他家の家名と令嬢の名を、元夫の不貞相手として実名で告げた。
当然のことながら、この発言も虚偽ならば立派な名誉毀損行為だ。
だが、彼女はそのリスクを犯してまで、あえて裁判で告発したのだ。
だからこそ、彼女の言葉には真実味があった。
これに傍聴席はざわめいた。
ちょっと待て。なんだ、それは……？　どういうことだ？

そこで皆がハッと気付く。金のためか……と。
国一番の商会を経営する伯爵家は、国一番の資産家でもあった。
そういえば、侯爵家に嫁いだ陛下の妹王女ミランダ様は、いまだに王女気分が抜けず散財を繰り返していると聞く。そして彼女の息子であり、ロザリアの元夫の現侯爵シグナス様もまた、母によく似て浪費家だとか。
傍聴席の貴族たちは皆、侯爵家が金に困っているらしいという噂は耳にしていた。
だがその噂はいつの頃からかなりを潜めた。
彼らは思い出す。ああ、そうか……。噂を聞かなくなったのは彼女が侯爵家に嫁いだあたりからだったなと……
つまり彼女は困窮する侯爵家を救うため、王命によって婚約者との仲を無理やり引き割かれたのだ。それは、ここまでの話を聞けば誰もが容易に想像が付くことだった。
その上でいざ嫁いでみれば、屋敷には夫の愛人が居座っていた。なるほど。それならば彼女が理不尽と言ったのも頷ける。
裁判を見守る貴族達は口々に言葉を発し、傍聴席はざわめきを増していく。
だが、彼女は更に驚くべき事実を告げた。
「それなのに……私に一切会えないことに家族が騒ぎ始めると、今度は私の有責で離縁を成立させようと、事もあろうに元夫は私を暴行するようにと使用人に命じたのです。そうです。私と使用人との不貞をでっち上げ、離縁を有利に進めるためです。侯爵家の敷地内で、当主自らが自分の

妻を暴行せよと使用人に命じる。こんな恐ろしいことがありますか？」
「夫が妻を暴行させる……？」
その時、裁判に訪れていた傍聴人達は皆、この証言に耳を疑った。
先程とは打って変わって傍聴席は静寂に包まれる。
もしこれが事実だとすれば由々しき事態だ。いや、それどころの騒ぎではない。これは立派な犯罪行為だ。傍聴人達の鋭い視線が侯爵家側に降り注がれた。
当然、侯爵家も黙ってはいない。
「異議あり！　彼女の言っていることは全て事実無根です！」
侯爵家側の弁護人が叫ぶ。
「ほう。争いますか？　こちらは出来れば穏便に済ませたかったのですがね。ですが、そちら側がそうおっしゃるのなら仕方がない。徹底的にやりましょう」
伯爵家側の弁護人はあくまでも強気だ。
だが侯爵家側の弁護人も負けてはいない。
「当たり前です！　こんなこと、認められるはずがないでしょう？　彼女は侯爵家の名誉を著しく毀損しています」
とはいえ、何やら旗色の悪い侯爵家。それはこの裁判に至るまでの経緯から見ても明らかだった。それにも関わらず、侯爵家の弁護人もまた、あくまでも強気だ。
そこにはもちろん理由がある。

この国の裁判は王家の意向に強く左右される、いわば出来レース。
ウィンダリア侯爵シグナスは、陛下の妹王女ミランダが産んだ息子。つまり陛下の甥にあたる。
王家が身内を庇うことなく、自らの手で罰するとは考えにくい。
しかし伯爵家もまた、この国の経済を支える大富豪。国にとってなくてはならない存在だ。
はてさて、陛下はどちらを選ぶのか？　貴族たちの関心はその一点に注がれていた。
だがそうは言ってもそこはあくまでも身内。おそらく国王は、自分の妹と甥を守るだろう。
それが傍聴席に座る貴族達、大方の予想だった。
実を言うと、伯爵家にとってもそれは最初から想定済みのことである。
その上で、あえてアルジール伯爵はこの裁判を起こしたのだ。
「さて、この先陛下はどうされるかな」
証言台で奮闘する愛娘を見上げながら、アルジール伯爵はほくそ笑んだ。
話はこの裁判の一月前に遡る。

第二章

「お荷物はこれだけですか？　随分、少ないのですね。それにドレスにしても、どれもこれも全て手を通した形跡すらない新品ばかりではないですか。これは一体どういうことなのですか？」
そう呆れながら私――ロザリア・ウィンダリア、いえ、ロザリア・アルジールに話しかけてくるのは、この日のために実家であるアルジール伯爵家に連絡して来て頂いた二人の男性です。
彼らは『荷物を迎えの馬車に積み込むためには男手が必要だ』と、父が元夫シグナスに掛け合って、最後だからとようやくこの屋敷に入ることが許可された者達です。
と、言いますのも、私がこの家に嫁いで来てからの三年。ただの一度として、私が実家に帰ることも、私の実家の人間がこの侯爵邸に足を踏み入れることも許されておりませんでしたの。
私はせっせと荷造りをしながら、二人からの質問に答えます。
「ええ、そのドレスは私が嫁ぐ時、侯爵夫人として恥ずかしくないようにと両親が誂えてくれた物なのですが、ご覧の通り全て手付かずですわ。だって侍女がいなければドレスを着ることも、髪を結い上げることも出来ませんもの」
「はぁ……。本当に侍女の一人も付けては貰ってはいなかったのですね……。ここにいるとそれが良く分かる……」

彼らは呆れたようにため息を吐きました。
「ですから私はこの三年間、掃除、洗濯、身の回りのことは全て自分一人でこなして参りました。侯爵家がしてくれたことは一日に一度、この別邸にその日の分の食事を運んで来る。ただそれだけでしたわ。今でこそもう慣れましたが、嫁いだ当初は何がなんだか分からなくて……。そもそもアルジール伯爵家は元平民とはいえ、叙爵されたのは私が生まれる前です。ですから私自身は生まれた時から伯爵家の娘として暮らしてまいりました。まして私は、王命でこの家に嫁いできたのです。ですから、なぜこんな扱いを受けなければならないのかと悔しくて……。随分泣きましたわ」
私の頬を涙が伝います。
それを見た彼らは本日二度目のため息を吐きながら、まるで信じられないものを見るような目で部屋の中を見渡しました。

◇　◇　◇　◇　◇

そう……。あれは今から三年前のこと。
私は王命によりこのウィンダリア侯爵家へと嫁いできました。
ですが、シグナス様との結婚式が終わり、侯爵家へと向かった私を乗せた馬車が、本宅の前に止まることはなく。私はそのまま真っ直ぐにこの別邸へと連れてこられたのです。
「お前は今日からここで一人で生活することになる。安心しろ、食うものは毎日届けてやる。だが

出来るだけ外へは出るな。目障りだ。お前のような元平民が名前だけでも私の妻だなんて、考えただけでも虫唾が走る」
突然のことに何がなんやら分からずただ呆然と立ち尽くす私に、シグナス様はそう冷たく言い放つと本宅へと帰っていきました。
もう夜も更けていました。仕方なく別邸の中に入るとそこにあったのは、硬いベッドと粗末なテーブルだけ。そして父と母が用意してくれた私の嫁入りのための荷物は、手つかずのまま部屋の中に積み上げられていました。
なぜ私がこんな目に遭うの……？　これから私はどうなるの……？
訳が分かりませんでした。
言い知れぬ不安が私を襲います。その夜は一晩中泣きました。
翌日、朝になっても侍女の一人さえ来ませんでした。
そうか……。昨夜シグナス様が言ったことは、全て本当だったのだ。私はこれからここで一人で生きていかなければならないんだ……
私の中にほんの少しだけ残っていた期待さえ打ち砕かれたのでした。
ですが、泣いていても何も始まりません……
私は仕方なく荷物を自分で片付け始めました。なにしろ時間はたっぷりあるのです。
なぜなら私は別邸に一人きり。他に何もする事がなかったのですから……
シグナス様の言った通り、一日に一度だけ私の食事を持って若い男性が別邸を訪れました。

男性はいつもテーブルの上にその日の食事を置いてすぐに出ていきます。
別邸で暮らすようになってからしばらくして、私は勇気を出してその男性に尋ねました。
「あの、汚れ物が溜まってしまって……。洗濯がしたいのです」
すると男性は黙って頷きました。
そして翌日。
「洗濯をする時だけここを出て、外の洗い場に行ってもいいそうです。洗い場は外に出て右に歩いていけば辿り着きます」と、そう返事をくれました。
その時、彼の口ぶりで分かりました。
彼はシグナス様に聞かなければ、私からの問いに答えることさえ許されていないのだと……
許しを貰った私は洗濯物を持って、洗濯場へと向かいました。
ですが侯爵邸は広く。洗濯場が分からずうろうろしていると、どこからか女性たちの話し声が聞こえてきました。
「あの女、ずっと別邸に一人で閉じ込められているんでしょう？　哀れよね」
「仕方がないわよ。伯爵令嬢とはいえ元は平民。あんな人が旦那様の妻だなんて、あのプライドの高い大奥様がお認めになるわけがないもの」
「それに旦那様にしたってそうよ。奥様はもう既にいらっしゃるのよ。あんな人を受け入れられるはずがないわ」
その話を聞いた私は、足がすくんで動けませんでした。

奥様は既にいる……？
話の主はどうやらこの屋敷の使用人たちのようです。
彼女たちの話を聞いて私は、なぜ自分がこんな境遇に身を置かなければならないのか、その理由がようやく分かった気がしました。
つまりアルジール家は、今は伯爵家といえど元は平民。義母はそれが気に入らないのです。
そしてシグナス様には私のほかに愛する人がいる。
しかもその女性は使用人たちから奥様と呼ばれ、既に本宅で暮らしているのだと。
私は夫と義母、両方にとって望まれぬ妻……
それはいいでしょう。でも、だったらなぜ、王命まで使って私を娶ったの……？
そのせいで私は愛する人と無理やり引き割かれたというのに……
考えなくても理由なんてすぐに分かります。全てはお金のためでしょう。
余りにも身勝手な仕打ちに私は怒りで身を震わせました。
「あら、こんな所で立ち聞きなんて随分と恥知らずなことをするのね」
その時、後ろから声がしました。気が付けば私は、使用人であろう女性たちに周りを取り囲まれていたのです。私が抱える洗濯物に気付いたのでしょう。
「あら、あんた洗濯に来たの？　だったらこっちよ」
その後、私は彼女たちに腕を掴まれ無理やり洗濯場に連れて行かれると、いきなり頭から水をかけられました。

「ごめんなさいね。洗濯の仕方を教えてあげようとしたら手が滑ったわ」
「でも、まるで濡れ鼠ね」
「酷ーい」
そう言って笑い合いながら……。信じられませんでした。
「私は侯爵様の妻よ？　貴方たち、こんなことをして許されると思っているの⁉」
叫んだ私を彼女たちが嘲笑います。
「あんた馬鹿なの？　旦那様があんたのことを妻だと思っているのなら、なぜあんたは自分で洗濯なんてしているの？」
「さっき聞いたでしょう？　旦那様には本宅にちゃんとした奥様がいるの。ベアトリス様って言ってね。ビアリー伯爵家のご令嬢よ。あんたとは違ってビアリー家は建国以来の名門。旦那様にとって、あんたなんてただの金蔓よ！」
私はその言葉に息をのみました。
それからというもの、私は洗濯場にいく度、彼女たちから嫌がらせを受けました。
それだけではなく。干していた洗濯物は、取り入れる時にはいつも私の分だけが地面に落とされ泥だらけ。これではなんのために洗濯しているか分かりません。
やむを得ず私は出来るだけ洗濯の回数を減らし、部屋に干すようにしました。
すると今度は、部屋に風を通すために開けた窓からゴミが投げ入れられるように。
仕方なく窓を閉じましたが、すると部屋の中はあっと言う間にカビだらけに。

それを必死にぬぐい取る。その度に涙が出ました。
なぜ私はこんなことをしているのだろう……。私が一体、貴方たちに何をしたというの……
結局、私にとってこの別邸での生活は、やむを得ない……仕方がない……毎日が諦めの連続でした。
ですが、そうなると外に出る機会も少なくなります。それからは孤独との戦いでした。
別邸は侯爵家の一番奥にあります。私は誰の声さえも届かないこの別邸でたった一人、なんの音もしない部屋でただ窓の外だけを見て暮らすようになりました。
一日がとても長く感じて、孤独で、寂しくて……。時々ふと叫びだしたくなりました。
この時私は初めて知ったのです。
人にとって一番辛く苦しいのは孤独なのだと……
そんな私を唯一支えていたのは、ただもう一度家族に会いたい……その思いだけ。
ですが、それも今日でようやく終わりを迎えます。
二人に話しながらあの辛かった日々を思い出し、私の頬を再び涙が伝いました。
「それにしても、本当に侯爵家からは誰一人として手伝いには来られないのですね？　侯爵家は体裁を整えることさえしない。今日、奥様が屋敷を出ていかれることは分かっているでしょうに……」
私の話を聞いて愕然としていた二人ですが、改めてこの家のおかしさに気がついたようです。
「この屋敷の者はたった一人を除いては、誰も私を奥様だなんて思ってはいませんわ。私がこの屋敷で世話になったと思うのは、唯一私を認めてくれたその人と、食事を運んでくれた青年の二人だ

けです。そしてシグナス様が言うには、その青年が私の不貞相手なのだそうです」
食事を運んでくれた彼にはシグナス様に用がある時だけ話しかける。
そんな関係……
「それなのに旦那様は、私に彼との不貞の濡れ衣を着せ、離縁を告げました。後で知ったことですが、シグナス様は本当に私を暴行するよう、彼に命じていたそうです」
その話に二人は驚きを隠せず、目を見開きます。
「……本当に酷い話だ」
「それでも、生きてこうしてここから出て行けるだけ良かったのだと思っておりますの。実家の両親が騒いでくれていなければ、私はおそらくあの人達に都合のいい金蔓として、死ぬまでここに閉じ込められていたことでしょう」
彼らは私のその言葉に息をのみました。
痩せた体……。髪は傷み放題、手は荒れて血が滲んでいました。この姿を見ただけで、私がこの侯爵家で今までどのような扱いを受けてきたか、容易に窺い知ることが出来るでしょう。
彼らは、もう一度別邸の中を見まわしました。
「よくこんな所に三年間もお一人で……」
彼らは、そう言って私を労ってくれました。

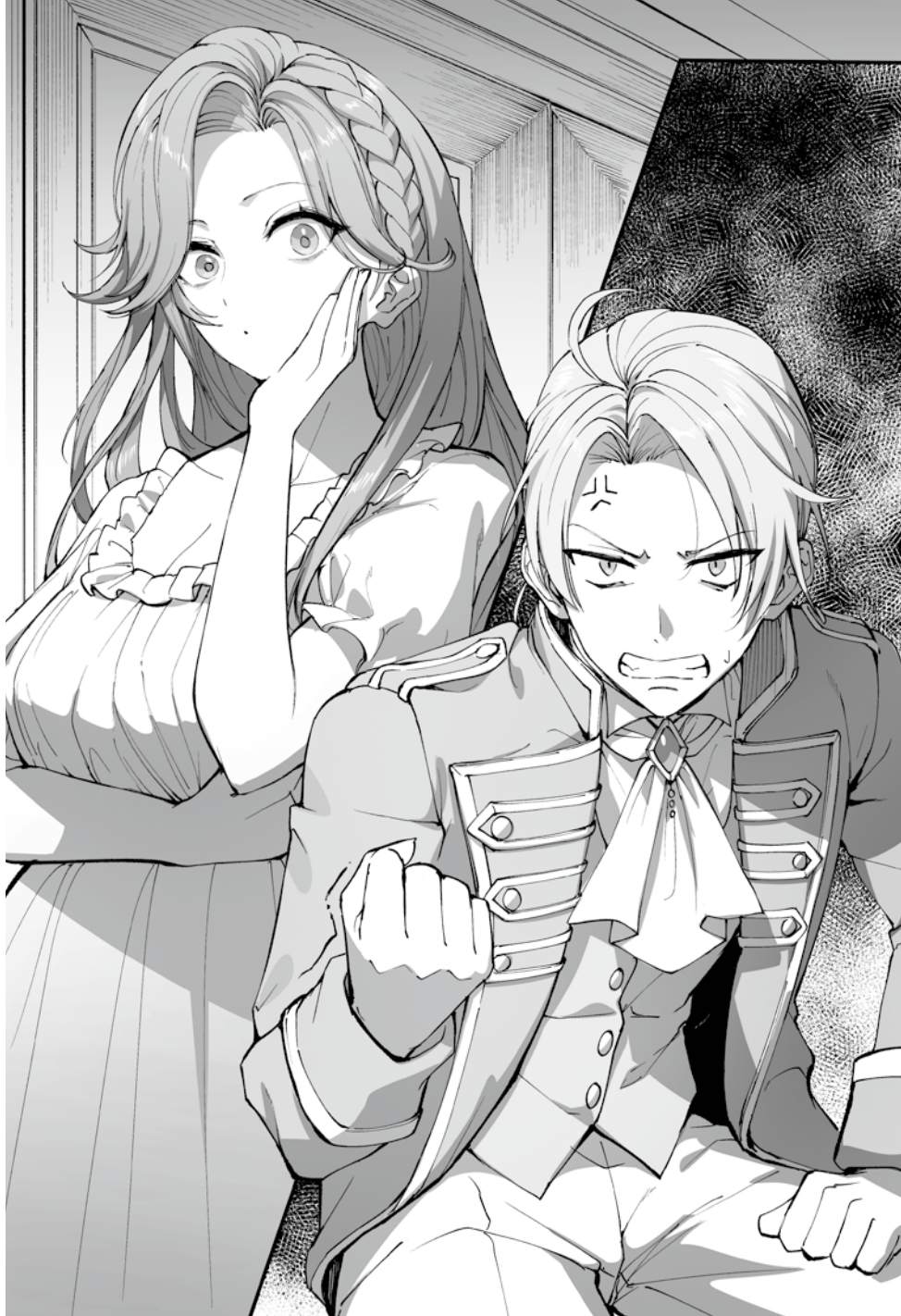
◇　◇　◇　◇　◇

「さあ、ではそろそろ参りましょうか。あの人達が待っていますわ」
私が声を掛けると、二人は私の荷物を別邸から運び出し、アルジール伯爵家が用意した馬車に積み込んでくれました。
そして全ての荷物が積み終わると、私は二人を連れて本宅に向かいます。
この家に嫁いで来て三年。離縁が成立し屋敷を出ることになった時、せめて最後の挨拶くらいはしていけと、シグナス様と義母に呼ばれていたのです。
エントランスで家令のニコラスに声を掛けそのことを告げると、「大奥様より伺っております。こちらにどうぞ」と、案内してくれました。
私達はニコラスの後を付いて廊下を歩きます。
シグナス様と結婚してからこの本宅に入れて頂くのは初めてのことでした。
初めて入った本宅は別邸とは比べものにならない程美しく、色とりどりの調度品や絵画が飾られ、チリひとつなく綺麗に掃除されておりました。
そんな中、廊下を歩く私には、侍女やメイド達から心無い暴言が浴びせられます。
「あの女やっと出て行くらしいわよ。本当、不貞だなんて恥ずかしくないのかしら？　穢らわしい」
「そうよ。旦那様の優しさに付け込んでいつまでも屋敷に居座るなんて、なんて厚かましいんでしょう」

「あんな女がこの本宅に入るなんて、いくら最後だからって奥様もきっと嫌な思いをされているわ。後で掃除しとかなくちゃ」
「消毒よ、消毒」
そしてキャハハハと皆で笑い合っています。侯爵家の使用人ともあろう者達が品のないこと。
それにしても随分な言われようです。私に聞こえるようにわざと言っているのでしょうけれど、残念ですね。そんな言葉、もうどれだけ言われても、もはや腹も立ちません。
ええ、この三年間で言われ慣れておりますので……
でも、私の後ろに続く二人はそうではないようです。
彼らは使用人たちの話を聞いて顔を歪め、互いに目配せをしました。
それもそうでしょう。本来なら、本妻である私がこの侯爵家の奥様と呼ばれる女主人のはず。
それなのに、この屋敷で彼女達が奥様と呼ぶのは、シグナス様の寵愛を受ける、彼の愛人ベアトリス様なのですから。
「旦那様、奥様をお連れしました」
ようやく辿り着いた部屋の前でニコラスが扉を叩き、中に声を掛けました。
そうです。使用人達の中で唯一、彼だけが私のことを『あの女』でも『あんた』でもなく『奥様』と呼んでくれていたのです。
「入れ」
部屋の中から不機嫌そうな声が返ってきました。

その答えを聞いて、ニコラスが扉を開けました。
部屋の中では、シグナス様と義母がソファーに腰掛けて優雅にお茶を飲んでいました。
「奥様が最後のご挨拶にと参られました」
部屋に入ると、ニコラスがもう一度二人に声を掛けました。
すると、シグナス様と義母はこちらを一瞥し、顔に怒りを滲ませました。
「なぜ、この本宅に部外者を入れた!? 私はそんな許可を出した覚えはないぞ! 主人の許可もなく勝手に屋敷の中に使用人達を招き入れるとは……常識がないにもほどがある!!」
シグナス様が声を荒らげます。
そうですよね。最後にわざわざ私を本宅に呼び寄せ、ここでの暮らしぶりについて実家で話さないようにと口止めするつもりだったのに、当の実家の人間たちをこの本宅まで連れて来たのでは本末転倒。意味がありませんもの。
だからこそ、ここではあえて知らないふりをします。
「あら? 何をそんなに怒っておられるのですか? 我が家の使用人がいて何か問題でも?」
「……っ!」
反論すると、普段従順な私が逆らったことがよほど気に食わなかったのでしょう。シグナス様は言葉を失ったあと、急にわなわなと怒りに震えながら顔を紅潮させ、声を荒らげました。
「なんだ、その口の利き方は! だいたいお前、分かっているだろうが離縁して屋敷を出たからと言って余計なことを一言でも喋ってみろ。お前も、お前の両親も、二度とこの王都には住めないよ

うにしてやるからな！　うちは侯爵家だぞ！　甘く見るなよ!!」
シグナス様の言葉に更に私は言い返します。
もし何かされても、今日なら後ろの二人が必ずどうにかしてくれるでしょうからね。
「シグナス様、今のお言葉は恫喝と捉えてよろしいのでしょうか？」
「恫喝？　貴方、口の利き方に気を付けなさい！　いつものように一人ではないからと、何をそんなに偉そうにしているの？　うちは侯爵家よ？　そんな使用人如き、何人いようとどうとでも出来るんですからね？」
「あらあら、お義母様まで……。そのお言葉も捉えようによっては、恫喝と受け取られても仕方のないものですよ？　そんなお言葉、仰ってよろしかったのですか？」
少し煽っただけで、簡単にいつもの様子を曝け出してくれて助かります。
私は後ろの二人に向かってにっこりと微笑みました。彼らも頷き返してくれます。
では、そろそろネタばらしといきましょうか。
「……それにごめんなさい、お義母様。実はこのお二人、私の実家から手伝いに来てくれた使用人などではございませんの。彼らは父からの訴えを聞いて貴族裁判所から遣わされた、調査員の方達なんですのよ。シグナス様とお義母様に大切なお話があるんですって」
「えっ!?　貴族裁判所？　訴えた!?」
訴えられたと聞いた二人は、余程驚いたのか大きく目を見開きました。
すると、調査員のうちの一人が一歩前に進み出て二人に告げます。



「はい。たった今ロザリア様が仰った通り、アルジール伯爵家はウィンダリア侯爵家を相手取り、貴族裁判所に訴えを起こされました。私はその事実確認のため、貴族裁判所から派遣された調査員のジャックと申します。そしてもう一人がマイケル」

彼はそう言って自分の名を名乗ったあと一礼し、更にもう一人の調査員を手で示しながら紹介しました。

マイケルさんもまた二人に丁寧に頭を下げます。

「さて本題ですが、このウィンダリア侯爵家には現在、ロザリア様のこの屋敷での不当な扱いに対する慰謝料の請求。また、伯爵家より毎月支払われていたロザリア様の生活支援金の返還請求。それに加え、ロザリア様有責の離縁理由への不同意。それに伴い、婚姻時に伯爵家より支払われたロザリア様の持参金の返還請求及び、不貞の汚名を着せられたことに関する名誉毀損。また、それに対する慰謝料の請求。以上の訴えがご実家であるアルジール伯爵家より提出されております。私達二人は今日、その調査のため、裁判所から派遣されこちらにお伺い致しました」

ジャックさんはシグナス様と義母にそう説明しました。

しかしまぁ、お父様もよくこれだけの数の訴えを起こされたものです。

ほら、ジャックさんから説明を受けた二人が怒りに身を震わせ、こちらを睨みつけているではありませんか。

「裁判？　そんな平民上がりの伯爵家の訴えを真に受けて、裁判所の調査員たるあなた方が、わざわざ我が家まで足を運んできたというのですか⁉　しかもこんな騙し討ちのような真似までして……。税の無駄遣いも甚だしいわ。兄に言いつけないと！」

義母は私を睨みつけるだけでは飽き足らず、調査員の二人にも声を荒げ突っかかっていきました。

先程は使用人如きと言い、今度は平民上がりの伯爵家ですか……？

その伯爵家からの資金援助で、侯爵家の借金が返済出来たというのに……

本当にこの人は何様のつもりなのでしょう……？

あ！　元王女様でした。そう、義母は現国王陛下の実の妹です。

ですが、目の前の調査員のお二人に、この義母の態度や発言はどのように映っているのか？

まぁ、それはいずれ裁判で明らかになることでしょう。

「申し訳ありません。ですが、こうでもしないとロザリア様が嫁がれてからの三年間、この屋敷でどのように過ごされてきたのか、その実態を窺い知ることは出来ませんでしたので……。それにお二人は分かっておられますか？　侯爵様とロザリア様の婚姻は王命により結ばれたものなのですよ？　もし伯爵家からの訴えが真実ならば、侯爵家は王命に逆らったことになる。これは由々しき事態です」

ジャックさんは義母にまずそう言って釘を刺しました。

その上で伯爵家が訴えを起こした理由をこう付け加えたのです。

「ロザリア様は伯爵家のご令嬢です。対してこちらは侯爵家。悲しいかな貴族社会では、低位の貴族は高位の貴族に対して立場が弱く、言いたいことも言えないのが実情です。こちらの家でも、その立場の違いから伯爵家からの訴えを何度も退けてこられたとお伺いしております。しかも何かに

つけて、アルジール家が新興貴族だからと言い訳にして。お二人はどう思われているかは存じませんが、同じ王都にいながら、嫁いだ娘に両親が三年もの間、ただの一度も会えないなんて誰が聞いても普通ではありません。ですからアルジール伯爵は苦肉の策として、裁判所という公的機関に訴え出たのですよ。公平な判断を下して欲しいと……ね」

「で……ですが、その女は私という夫がいながら不貞を働いた愚かな女なのです。だから罰として別邸に移したんだ。私達は何も悪くない！」

シグナス様は往生際悪く、まだそんなことを宣っております。

なるほど、私が別邸に移された理由は不貞を犯したからですか……？

馬鹿ですね。裁判所がこうして調査員を、その身分を隠してまで派遣してきたのです。

普通は、その裏に何か理由があると思いません？

「我々が調べたところ、ロザリア様に不貞の事実はありませんでしたよ。では反対にこちらからお伺い致します。侯爵様はどのような証拠があって、ロザリア様が不貞を犯したと言っておられるのですか？　妻であるロザリア様をあのような過酷な状況下に置いていたのです。余程確かな証拠があるのでしょうね？　我々が納得出来るような証拠を今、この場にご提示願えますか？」

しかしジャックさんはシグナス様の言い訳などまるで相手にもせず、冷淡な口調でそう問い質しました。本当に頼もしいですわね。

「そ……それは……。ち……違う！　その女は確かに不貞を働いたのだ！」

シグナス様は狼狽えながら怒鳴るのがやっとです。

でもね、それでは質問に対する答えにはなっていませんよ。

案の定、ジャックさんとマイケルさんは呆れたような表情を浮かべ、ため息を吐いているではありませんか。本当に今日この家に来てから、この二人は何度、ため息を吐くのでしょうね。

「証拠など何もないのですね？　ですがそこまで言い張られるのならば、違う質問を致しましょう。ロザリア様はいつ不貞を働き、いつからあの別邸で生活されていたのですか？　嘘を吐かれてもすぐに分かりますよ？　私達は実際にあの場所を見てきたのですから……」

ジャックさんは更にシグナス様を問い質しました。

「い……一年か……二年か……？」

流石、裁判所の調査員。シグナス様をジリジリと追い詰めていきます。

その証拠にシグナス様はジャックさんとマイケルさんの顔色を窺いながら、しどろもどろになっています。自分のしたことだというのに、なぜ語尾が上がっているのでしょう？

不思議なことです。

「一年か二年ですか？　これはまた、随分と開きがありますね？　ですが私たちはロザリア様から、嫁いだその日からあそこで生活してきたとお聞きしておりましたがね。まぁ、いいでしょう。侯爵様の言い分が正しいとして話を進めましょう。妻が不貞を働いたにも関わらず、貴方はなぜすぐに離縁なさらなかったのですか？　貴方のお話を聞く限り、ロザリア様の不貞が発覚してから最低でも既に一年以上の年月が経過しているわけですよね？　そしてなぜ、今になってその不貞を理由に離縁なさったのですか？　理屈があいませんよ？　伯爵家が騒ぎ出したから、痛い腹を探られない

ように……とか？　そう考えるのは私たちだけでしょうか？　ねぇ、大奥様？　貴方はどう思われますか？」
ジャックさんは突然、体の向きを変え今度は義母に問いかけました。
「え？　私……？　そ……それは……」
突然自分に話が振られたことに驚いたのか、義母は顔を青ざめさせながら、こちらもしどろもどろです。
「急には答えさえ思い浮かびませんか？　仰っていることが真実ならばすぐに答えられると思うのですがね……。では、仕方ありません。こちらから証拠をお見せしましょう。ロザリア様が不貞などされていないと私たちが判断する確かな証拠をね。こちらの書類をご覧下さい」
今度はマイケルさんがそう言って二人に近付き、一枚の書類を二人の前にあるテーブルの上に広げました。
「こ……これは……？」
シグナス様が消え入るような声で、震えながら問いかけます。
さすがにこれが何なのか知っているようですね。
ですが、マイケルさんはそんなシグナス様に気付かぬふりをして、その質問に答えました。
「おや？　見て分かりませんか？　教会が発行する白い結婚の証明書ですよ？　侯爵様もお聞きになったことくらいはあるでしょう？　本来、これがあれば離縁などする必要もなく、婚姻自体を白紙に戻せるんです。ですが、今大切なのはそこではありません。この書類が、ごく最近発行されたものだということが大切なのです。つまり、この証明書が発行された時点で、ロザリア様は純潔を保っておられたということです。おかしいですね？　貴方の話では少なくともロザリア様は一年以上前には不貞を働いていたのでしたよね？　だったらなぜロザリア様は今、純潔を保っておられるのですか？」
「は？　純潔……？　まさか……しかし、この女には……」
シグナス様は呆然として呟きました。
はい。そうです。私にはこの家に嫁ぐ前、婚約者がいました。
そのためシグナス様は既に私が純潔を失っていると思っていたのでしょう。
でもね、私は貴族令嬢なのですよ。
式を挙げる前にそんなふしだらなことをするわけがないでしょう？
旦那様と一緒にしないで下さい。
ですがそれは、シグナス様にとってどうしても受け入れ難い事実だったようです。
突然思い付いたかのように大声で怒鳴り始めました。
「そ……そんなはずはないっ……！　ロザリアは別邸の外には一歩も出られなかったはずだ！　そんな証明書など取りに行けたはずがない！　それは真っ赤な偽物だ！」
あらあら、旦那様。ついに言ってしまいましたね。
一歩も屋敷の外に出られなかった……
それは即ち、私を別邸の中に監禁していたことを認める発言ですよ？

シグナス様は更に墓穴を掘ります。
「それにこの女は私がアレックスに……」
「ほう。アレックス？　息子がどうかしましたかな？」
シグナス様の言葉をそう言って遮ったのは、先程私達をこの部屋に案内してくれた家令、ニコラスでした。
実はいつも私に食事を届けてくれていた青年。
彼の名はアレックスといい、ニコラスの息子でした。
そして、シグナス様が彼に私を暴行するよう命じたことを教えてくれたのも、このニコラスだったのです。
「息子に、奥様に狼藉を働けとでも命じられましたかな？　そして、それは上手くいったはずだと？　だが私が大切な息子に、そんな非道なまねをさせるはずがないでしょう!?　これ以上あなた方の悪巧みに息子を巻き込まないで頂きたい!!」
ニコラスが険しい表情をシグナス様に向け、怒声をあげました。
彼は普段はとても温厚な男性です。今までよほど腹に据えかねていたのでしょう。
「……っ！　悪巧みとはなんだ！　お前、主人に向かってそんな口を利いて、ただで済むと思っているのか!?」
ニコラスの放つ怒気に一瞬言葉を失ったシグナス様は、すぐに怒りを露わにすると今度は彼に向かって声を荒らげました。

それを聞いたニコラスは歪な……それでいてどこかとても寂しそうな笑みを浮かべると、シグナス様に向かって語りかけたのです。
「まだそんなことを言っているのですか？　安心して下さい。私にはもう、貴方達なんかにお仕えする気持ちは毛頭なくなりましたよ。私も奥様と共に、今日でこの屋敷をお暇致します。やっと奥様をお救いすることが出来たのです……。もう私にこの屋敷に残る意味もありませんのでね……」
「この女を救うだと……!?　もしやお前がこの女に手を貸したのか!?　この裏切り者め!!」
シグナス様は怒りで顔を真っ赤に染め、ニコラスを指差しながら更に罵声を浴びせかけました。
調査員のお二人が見ておられるというのに、なんという醜態でしょう。
こんな男が侯爵だなんて……
裏切ったとかなんだとか、問題はそこではないでしょうに……
ですがニコラスは、さっきから怒鳴りっぱなしのシグナス様に対し、怯む素振りも見せず言い返しました。そう……先程と同じ、とても寂しそうな表情を浮かべながら……
「裏切り者ですか……。随分な言われようですね。ですが、旦那様。どこの世界に、息子が犯罪に手を染めるのを黙って見ている親がいますか？　しかもそれを命じたのが、主家の主人だなんて……。聞いて呆れます。しかしこれではっきりと分かりましたよ。貴方達は何も気付かない……。人の気持ちも、それ以外も……。分かっておられますか？　肝心の息子は既に、お暇を頂いておりますよ。思い出してみてください。久しくアレックスを見ていないでしょう？　貴方にとって息子は、自分の言うことを聞く便利な道具。それ以上でも以下でもない。だから息子が屋敷から去って

も、貴方は今日まで気付きもしなかった……」
ニコラスに教えられ、ようやく二人はそのことに気付いたのでしょう。そういえば……と顔を真っ青にしておりますが、何もかももう遅すぎたのです。
彼は大切な証人ですからね。きちんと我が家で保護させて頂いておりますよ。
「ですがね、息子も人の心を持った人間です。貴方に奥様を襲えと命じられた息子は、思い悩んで私に相談してくれました。息子の口からその話を聞いた時の私の気持ちが分かりますか？　私も息子も、これまでこの侯爵家のためにと必死に尽くして参りました。しかしその結果、貴方達は私達親子を便利扱いし、挙げ句、息子に罪を犯せと命じたのです。その時点で私達は貴方がたを見限りましたよ。当たり前でしょう。尽くす価値が貴方達にありますか？　ですが、思い返したのです。このまま放っておけば、なんの罪もない奥様が、今度こそ貴方達にどんな目に遭わされるか分からないと。ですから私は奥様に声をお掛けしたのですよ」
「ええ、ニコラスは私を屋敷の外に出してくれました。そのお陰で私は両親に全てを話し、今後の対策を相談することが出来たのです。そして、教会に行ってあの証明書を頂くことを思い付きました。ですから旦那様には残念ですが、その証明書は間違いなく本物ですわ」
私はニコラスの言葉の後を継ぎ、そう付け加えました。
「貴様ら、許さん！　許さんぞ！！」
シグナス様は尚も真っ赤な顔をして叫び続けております。
といっても、別に今更貴方に許して貰わなくても、私は痛くも痒くもありませんけどね。

ですがニコラスは違います。彼は最後まで根気よくシグナス様に話しかけていました。
彼はシグナス様が生まれる以前から侯爵家に仕えているのです。彼らには……特にシグナス様には深い思い入れがあるのでしょう。
それでもやはり、ニコラスの想いがシグナス様に届くことはありませんでしたが。
「分かりませんか？　旦那様は負けたのですよ。既に教会によって奥様の純潔は証明されているのです。貴方がなんと言い繕おうと、奥様は不貞など犯してはおられない……。それを教会が証明しているのです。ではなぜ、奥様は別邸であんな生活をされていたのですか？　なぜ、離縁が奥様有責だと仰られるのですか？　理由がありません。奥様に離縁されるような過誤はないのです。ですが旦那様は違う。この屋敷には既に使用人達が皆、奥様と呼ぶ別の女性が住んでいるのですよ？　本当に不貞を犯していたのがどちらかは、火を見るより明らかだ。まぁ、いずれ裁判になれば、その全てが明らかにされるでしょう。ああ、そうだ。それからご心配なく。私は真実のみを証言致しますから……」
「……ま……まさか……お前……。証言台に立つつもりか……？」
ニコラスの言葉を聞いたシグナス様は、先程までの威勢はどこへやら。声を震わせながらそう尋ねると、後は黙り込んでしまいました。
「そうしなければ貴方達の目は永遠に醒めないでしょう？　私はね、裁判を通じて真実が明らかになり、罪を犯した者達が正しく裁かれることを望んでいる。ただそれだけです」
長年自分達に仕えてくれたニコラスが証言台に立つと聞いて、流石にシグナス様も義母も動揺し

ているようです。
おそらく私が次にこの二人に合うのは裁判所。
もうこうして面と向かって話す機会は、二度と訪れることはないでしょう。折角です。私はずっと言いたくても言えなかった、三年間の思いを吐き出そうと思いました。
私は二人を見据えながら、ゆっくりと語り始めました。
「旦那様、お義母様、私は王命によって意に沿わぬ結婚を強いられました。それでも私は貴族の娘です。これは自分の運命なのだと受け入れ、この侯爵家のために尽くそう……そう決意してこの家に嫁いで来たのです。でも貴方たちは、体裁を整えるために式だけを挙げると、その夜からすぐに私を別邸に閉じ込めました。そのせいで私がこの三年間、どんな暮らしをしてきたか貴方達は知っていますか？　きっと私のことなんて貴方達は興味すらなかったでしょう。貴方達が興味を持っていたのは、私の実家から支払われる生活費という名の支援金だけだったのですから」
ようやく自分達が今、置かれている状況が理解出来たのか、シグナス様と義母は言葉もなく、ただ俯いて私の話を聞いていました。
私は更に二人に現実を突き付けます。
愛する人と引き離され、その後三年もの間、ずっと苦しめられ続けてきたのです。
最後くらい思いを吐き出してもバチは当たらないでしょう？
私は怒りに拳を握り締め、更に思いの丈をぶつけました。
「貴方達のその態度のせいで、私はこの侯爵家で虐げられ、死にかけたことさえあったのです。これから貴方達が私にしてきた扱いが、裁判を通して白日のもとに晒されることになります。それに私が純潔であるということがどんな意味を持つのか、既に分かっていますよね？　そして、貴方達にはこの裁判を示談にする道さえない。本来、白い結婚の証明書があれば婚姻自体を無効に出来ます。そうすれば私の戸籍にも傷は付きません。でも、あえて私は旦那様と離縁という形を取り、アルジール家は裁判に訴え出た。その理由をゆっくりと考えてみて下さい。ではまた、裁判所でお会いしましょう」
私はそう言い残すと、ニコラスとジャックさん、マイケルさんと共に部屋を後にしました。

◇　◇　◇　◇　◇

部屋から出ると、エントランスに向かう廊下には、ベアトリス様と数人の侍女たちが私を待ち構えるようにして立っていました。
あら、最後くらいお見送りでもして下さるのかしら。
ベアトリス様は、屋敷の中だというのに髪を綺麗に結い上げ、豪華なドレスに身を包み、高そうな宝石をこれでもかという程ジャラジャラ付けておられます。
別邸に閉じ込められ、擦り切れた部屋着やお仕着せを着て生活してきた私とは大違いです。
私と同じことを思ったのでしょう。ベアトリス様を目にしたジャックさんとマイケルさんは、私と彼女、両方に目をやり見比べています。

「貴方、散々煩わせておいて、奥様には挨拶の一つもないの？」
ベアトリス様の後ろに控える侍女の一人が、威圧的に私に問いかけました。
彼女がこの屋敷の侍女達を纏める侍女長ニーナです。
煩わせた？　私が？　ベアトリス様を？　いつ？
反対に私が、彼女の命を受けた使用人たちから嫌がらせを受けていましたけど？
頭の中に大量の？マークが飛び交う中、ニコラスがその侍女を諌めました。
「ニーナ、奥様とは一体誰のことを言っている？　この家の奥様だったのはお前達の目の前にいらっしゃるロザリア様だ。その女は旦那様のただの愛人に過ぎない。侍女たちを束ねる侍女長の立場にありながら、お前にはそんなことも分からないのか！」
「……っ！」
ニコラスが言い放った愛人という言葉に、誰よりも強く反応したのは他ならぬベアトリス様でした。彼女は顔を赤く染め、怒りを露わにしたのです。
「この方が噂の……？」
私達の後ろに控え、彼女との一連のやり取りを見ていたジャックさんは、私に確認するように尋ねました。
「ええ、ベアトリス様ですわ」
私が頷きながら答えると、ジャックさんとマイケルさんは互いに目配せをして顔を歪めました。
まぁ、そうですよね？

たとえどれ程シグナス様に愛され、屋敷の中では奥様と呼ばれ侍女達に傅かれていても、所詮それはこの屋敷の中だけでの話。世間から見れば彼女はシグナス様のただの愛人に過ぎません。
ですから当たり前のことですが、彼女には夜会や舞踏会の招待状が届くこともありません。
それが一体何を意味するのか。彼女を奥様と呼ぶ侍女達には分からないのでしょうか？
ベアトリス様は偉くご立腹の様子でニコラスを怒鳴りつけました。
「あなた！　使用人の分際でこの私に大層な口を聞くじゃない!?　シグナスにお願いして貴方なんてクビにするわよ！」
そういえばニコラスが怖気付くとでも思ったのでしょうか？
残念ですね。ニコラスは反対に笑みを浮かべておりますよ。
「その必要はありません。私も奥様と共に、今日限りでこのお屋敷をお暇致しますので……」
「えっ!?」
ニコラスがベアトリス様に返したこの言葉にそう驚きの声を上げたのは、ニーナでした。
おそらく彼女は分かっているのでしょう。
ニコラスがこの屋敷を去ることが、侯爵邸にどんな影響を及ぼすのかを……
「……あら、まぁ、そんな女に付いて行くなんて貴方ももの好きね」
反対に何も分かっておられないベアトリス様は、そんな悠長なことを宣っておられます。
いえ寧ろ、自分の存在に否定的なニコラスが、私と共に屋敷を出て行くことを単純に喜んでいる……そんな様子です。

まぁ、私が今日この屋敷を出て行くことで、彼女はようやくその後釜に座れるのです。
そりゃあ、嬉しくもなるでしょうね。
でも、私も彼女には感謝しているのですよ。だって、ベアトリス様は自分の立場を守るため、シグナス様が私の元へ来るのを止めてくれていたのです。
ベアトリス様からしてみれば、一番避けたいのは正妻の私とシグナス様との間に子が出来ること。
もし万が一にでも子が出来れば、侯爵家の後継は間違いなくその子になります。そうなれば自分が子供を産んでも、その子は侯爵にはなれませんもの。
いえ、それどころか私の産んだ子が侯爵家の跡を継げば、自分は間違いなく侯爵家を追い出される……そう考えたのでしょう。
有り難いことです。そのお陰で私は清い体のままでいられたのですから。もし一度でもシグナス様と閨を共にし純潔を失っていたら、今回のこの計画は上手くいかなかったのです。
まぁ！　そう考えれば彼女にはお世話になりっぱなしではありませんか。
これは最後にお礼くらい言わないといけませんわね？
彼女にお会いすることは当分ないでしょうから、それならば彼女の望みを叶えて、こちらから挨拶してみようかしら。
そんなことを考えていると……
「ふふん。でもまぁ、やっと出て行くのね。お飾りでさえない侯爵夫人様！」
私を嘲るような声が聞こえてきました。

あらあら、私ったら。挨拶するかどうか迷っているうちに、ベアトリス様の方から先に話しかけられてしまったではありませんか。
お飾りでさえない侯爵夫人……。なるほど。上手いことを言いますね。
でもそうすると、彼女達にも私が侯爵夫人だという認識はあったわけですね？
「やっと？　何を仰っているのです？　私は嫁いだその日からずっと旦那様とは離縁して、こんな家さっさと出て行きたかったのですが？　でも、旦那様の方が私を手放さなかったのですよ。ですから私は、今日やっとこの侯爵家から解放されて清々しておりますわ」
ええ、私は本当の気持ちを正直に言ったまで。
それなのにベアトリス様は、私が痩せ我慢しているとでも思ったのでしょうか？
いきなり怒鳴り始めました。
「嘘おっしゃい！　貴方、強がりも大概にしなさいな！　シグナスはいつも言っていたわ。貴方との結婚は王命で決められたものだから逆らえない……。だから自分がどれだけ嫌でも仕方がないんだ。どれほど貴方を追い出したくても、貴方が自分から出て行かない限りこちらから追い出すことは出来ないんだって……。君をいつまでも侯爵夫人にしてあげられなくて申し訳ないって、彼はいつも私に謝っていたのよ！」
ベアトリス様のこの言葉を聞いた私はようやく気付きました。シグナス様は彼女に、自分の都合の悪い真実は何一つ教えていないのだ……と。
きっとシグナス様は私を悪者に仕立て上げることで、彼女の機嫌を取っていたのでしょう。

まぁ、それならそれでこちらにとっては好都合。少し揺さぶりを掛けてみることにします。
侯爵家の実情と真実を彼女達に教えて差し上げましょう。
それに父は根っからの商人です。知らなかったとはいえ、温情なんて掛けてはくれません。
彼女達、特にベアトリス様には覚悟しておいて貰わないと……。父にとってベアトリス様は、使用人達に命じ可愛い娘を虐めぬいた単なる不貞女に過ぎないのです。
「あら、本当のことですわよ。私達の婚姻も、侯爵家の方から陛下にお願いされたのですわ。そういえば、その頃にはもうベアトリス様は旦那様とお付き合いされていたはずですのに……おかしいわね。旦那様はベアトリス様より私を妻に選ばれた……そういうことなのかしら？」
私はたった今、その事実に気付いたかのように首をコテンと傾げました。
「……っ！　そんな話、誰が信じるものですか！」
私に馬鹿にされたと思ったのでしょう。
屋敷を出て行く私を嘲笑おうと態々待ち構えていたベアトリス様は、私に反論されたことが余程お気に召さなかったらしく、目を釣り上げて怒っておられます。
「まぁ、信じるか信じないかはベアトリス様の自由です。でも、先程も申しましたが、これは全て本当のことですよ。旦那様もお義母様も口では私を悪し様に罵っておられたようですが、本当は離縁なんて望んでいなかったでしょう。もしそんなことになれば、我が家からの支援金が入ってこなくなりますものね。明日からは大変ですわよ。確実に貴方達の中の何人かは職を失うでしょうね。だってお給金が払えなくなりますもの。まぁ、貴方達がただ働きで良いと言うのなら話は別ですけれど」
私はそう言ってベアトリス様の後ろに居並ぶ侍女達を見渡しました。
「ただ働き……」
彼女達は揃ってごくりと唾を飲み込みます。
彼女達だって馬鹿ではありません。私の実家が国一番の資産家であることくらい知っています。なぜなら父は国への納税額やその貢献度の高さから、男爵、子爵をすっ飛ばしていきなり高位貴族である伯爵に取り立てられたのですから。
アルジール家を知らない者なんてこの国にはいません。国一番の大商人。我が家からこの侯爵家にお金が流れていたことなんて、少し考えれば容易く想像がつくはずです。
「ベアトリス様もそうですわ。そんな高価なドレスや宝石、これからは身につけることさえ出来なくなるでしょうね」
「えっ？」
ベアトリス様は分かりやすく声を上げました。
あら、この方はそんなこともお分かりではなかったのかしら。
まぁ、ここからが本題です。私は指を二本立てました。
「二人。もし私に心から謝罪するのであれば、この中で二人だけ私の実家、アルジール家で雇ってあげてもよろしくてよ」
この私の言葉に、侍女達は顔を見合わせました。

「貴方のところへなんか行くわけがないでしょう！」
その時、ニーナが一歩前へ出て皆を手で制しながらそう言い放ちました。
あらあら。皆の意見も聞かずにそんなこと勝手に貴方が決めても良いのかしらね。
でもまぁ、私としては別にどちらでも良いんですけどね。
「そう……？　残念だわ。実はね、私、侯爵家を訴え出ることに致しましたの。だってそうでしょう。私と旦那様は王命で結ばれた夫婦。それなのにいざ嫁いでみると屋敷には愛人がいたのよ？この婚姻が王命だと知っていながら……。ね？　ふざけた話でしょう？　これって陛下の決定に背く行為よね？　それに貴方達も知っているでしょう？　この家が私にした仕打ちを。貴方達にも身に覚えがあるはずよ？　それらを含めて全部まとめて裁判に訴え出ることにしたの。私の後ろにいらっしゃるお二人の男性ね。実は裁判所の調査員の方達なのよ。貴方達、さっきから彼らの前でも私のことを散々罵倒していたわよね？　それにこっちにはニコラスという証人もいるの。うふふ。貴方達も私への慰謝料、きちんと用意しておいてね」
「え……？　裁判に訴えた……!?」
私がにっこり笑うと、彼女達は恐怖からか突然震え始めました。私は更に揺さぶりをかけます。
さて、現実を知った彼女達はどうするのかしら……？
「それからね、折角だからもう一つ大切なことを教えてあげるわ」
「……えっ！　まだ何かあるの!?」
ベアトリス様が目を見開きます。

「ええ……。実はベアトリス様の身に付けているその宝石やドレスね。私の実家が経営する商会の物なのよ」
その答えを聞いたベアトリス様は、安心したのか息を吐いてから声を荒らげました。
「……貴方ねぇ、それがなんだって言うのよ。売上に貢献してあげたんだから、感謝して欲しいくらいだわ」
あらあら。私の言葉の意味が全く分かっておられなかったようですね。
さっき親切に教えてあげたのに……
『そんな高価なドレスや宝石、これからは身につけることさえ出来なくなるでしょう』ってね。
仕方ありません。きちんと分かるように説明してあげましょう。
「それがそうではないんです。そのドレスや宝石は、身内だからとツケで購入された物。まだお代は頂いていないんですの。ですから先程私が言った通り、そのドレスや宝石の所有権はまだうちの商会にあるんです。つまり、それらは全て私の実家が経営する商会の物ということです。ご理解頂けました？」
「え？」
あら、やっとご理解頂けたようですね。
ベアトリス様が狼狽えておられます。
「それでね。ベアトリス様もご存じの通り、今日、私と旦那様は離縁致しましたでしょう？　残念ながらアルジール家とウィンダリア家の縁は今日をもって切れたのです。ですから、もうつけはき

かなくなりました。そのドレスや宝石は代金をお支払い頂くか、もしくは所有者であるアルジール家へ返して頂くことになりますわ」
「なんですって⁉　そんなの嫌よ！　これは私の物だわ！」
「そうですか？　では旦那様に代金を支払って頂くしかないのですが……。ねぇ、ニコラス。そんなお金、侯爵家にあるかしら？」
私はまた、コテンと首をかしげてみせました。
「いえ、おそらく難しいかと……」
ニコラス、グッジョブです。私の欲しい答えを頂きました！
「難しいそうですよ。ねぇ、ベアトリス様。どうされます？　それとも、ベアトリス様が代金をお支払い下さるのかしら？　どちらにせよ、おそらく数日以内にはうちの商会から侯爵家に督促状が届くと思いますよ。お支払いよろしくお願いしますね」
「……督促状……。そんな……嘘……嘘よ……」
ベアトリス様は項垂れて力なく呟いておられます。
「嘘ではありませんよ。でも、折角ですわ。ここには法律の専門家である裁判所の方がいらっしゃいます。聞いてみましょうか？　ねぇ、ジャックさん。ベアトリス様が嘘だと仰るから、念のため確認したいのだけれど、私の言ったことは間違っているかしら？」
「いえ、何一つ間違ってはおりません。我が国の法ではそうなっております。そもそも身内だからと、支払えない程の高価な買い物をツケですること自体が間違っております」

ジャックさんはきっぱりとそう告げました。
「……だ、そうですよ。どうします？」
私はまた、ベアトリス様ににっこりと笑いかけました。
あら、ベアトリス様のお顔の色が少しお悪いような……。気のせいかしら……？
それと同時に侍女達も、この侯爵家にあまりお金がないことにようやく気付いたのでしょう。
何しろ買った物の代金さえも支払えないのですからね……
あらあら、ただ働きが現実味を帯びてきましたね。
「あの……。もし……謝罪して伯爵家で雇って貰えたら慰謝料はどうなるのでしょうか？」
そう恐る恐る尋ねてきたのは、ニーナでした。
あら貴方、さっきはあれ程偉そうに、私のところへなんか行かないって言い放ったのにね。
変わり身の早いこと……。私は呆れながら答えました。
「それはもちろん、我が家の大切な使用人を訴えるわけにはいかないわ」
私は少し大げさに首を振ってみせました。
その答えを聞いた侍女達が、またも顔を見合わせます。それでもベアトリス様の手前か、それとも彼女達同士の駆け引きか。この場で名乗り出る者はいませんでした。
ただ、彼女達の揺さぶりには成功したようです。
だってあれほど威勢の良かったベアトリス様も侍女達も、今は借りて来た猫のようにしゅんとしているんですもの。

「では、私は実家に帰りますから、そこ、退いて下さらない？」
私が命じると、今まで廊下を塞いでいた使用人達はすっと廊下の端に退きました。
今度は本当に、見送られるような構図です。
出て行く日になって初めて、使用人たちに従って貰えるなんて……皮肉ですね……
私達は彼女達が開けた廊下の真ん中を堂々と歩きます。
エントランスに差し掛かった時、後ろから声が掛かりました。
「あの……本当に謝罪すれば伯爵家で雇って頂けるんですよね？」
今度は誰かも分かりません。三年もこの屋敷にいて、私はニコラス、アレックス、ニーナ位しか使用人の名前を知らないのです。そもそも彼女達は私に名乗ってさえくれていないのですから……
「ええ、心からの謝罪があればね。但し、二人だけよ。それ以上は無理。数が多い場合は、我が家への忠誠心で決めさせて頂くわ。では、お待ちしているわね」
私はそう答え、ヒラヒラと後ろに向かって手を振ると、エントランスを抜けて馬車に乗り込みました。

第三章

「お疲れ様でした。少しは思いを吐き出せてスッキリしましたか？　まぁ、いきなり話に巻き込まれたこっちは溜まったものじゃありませんでしたが……」
馬車に乗るなり私の前に座ったジャックさんが、労いなのか嫌味なのかよく分からない言葉を掛けてくれました。
「……ええ、まぁ。まだまだ言ってやりたいことは山ほどありましたが、それは裁判での楽しみにとっておきます」
私は苦笑いを浮かべました。
三年間の恨み辛みは、これくらいではとても晴れるものではありませんからね。
「しかしまぁ、貴方があんなにじゃじゃ馬だったとは思いませんでしたよ」
あら、バレました？　では、さっきのはやはり嫌味だったのですね。
「しかし私個人としては少しスッキリしましたよ」
ジャックさんは腕組みをしながら更に私に話しかけてきます。反対にマイケルさんはジャックさんの隣で大人しく、私達の話を頷きながら聞いていました。
私とニコラスが去った侯爵家はきっとこの先苦労するはずです。

私が去ったことで我が家からのお金が入ってこなくなり、ニコラスが去ったことで家政が滞る。おそらく残った使用人達では、あの家の人々の浪費を止めることは難しいでしょう。
この後、果たして侯爵家がどうなっていくのか……。うふふ。楽しみ過ぎます。
まぁ、心配しなくてもこの後の侯爵家のことは、先程私が揺さぶるだけ揺さぶった侍女達が教えてくれることでしょう。
「とはいえ、今まで大変な思いをされたのは事実ですからね。離縁して実家に戻られるご令嬢に対してこんなことを申し上げるのは大変失礼だとは思いますが、私は貴方が無事にあの家を離れられて良かったと思いますよ。今日たった一日でしたが、私達は貴方の側にいて、貴方があの家でどれ程辛い状況に置かれていたのかよく分かりましたから」
すると、不意にジャックさんにそう優しい言葉を掛けられました。
あれ？　やっぱり私、この人に労られています？
「貴方はついていた。あの家には、ここにいるニコラスさんがいましたからね。もし彼がいなければ貴方の言う通り、本当にどうなっていたか分からなかったでしょう……」
彼はそう言ってニコラスに微笑み掛けました。
「いえ……私など……」
ニコラスは謙遜(けんそん)して首を振りますが、本当にその通りなのです。
彼が初めて声を掛けてくれた日のことを、私は忘れたことはありません。
その日はとても寒い日でした。洗濯をしていた私は、侍女にわざと頭から水をかけられたのです。

侯爵邸では、こんなことは日常茶飯事でした。
だからその時は、『ああ、またか……』それくらいにしか思っていませんでした。
でもその日は、いつもとは違いました。きっと水をかけられたせいで風邪をひいたのでしょう。
夜になると、私は酷い寒気と頭痛に襲われ、気が付くと体中が熱かったのです。
熱があるんだ……。すぐに分かりましたが、だからといってこの屋敷には私を助けてくれる人などいないと思っていました。
私はただ布団にくるまって寒さに耐えていましたが、その内、息をするのも苦しくなってきました。ああ、もうダメだ……そう諦めかけた時、ニコラスが現れたのです。
『奥様！　奥様！　大丈夫ですか⁉』
彼は私に呼び掛け、熱があることに気付くと、医師を呼び、消化に良い物をアレックスに届けさせてくれました。お陰で今、私はここでこうして生きているのです。
もしこの時私が死んでいたら、あの人達は一体どうするつもりだったのでしょう？
もちろんこの件は裁判でも証言するつもりです。この時私を診察してくれた医師もまた、既に証人として登録しております。
私も父と同じで、転んでもただでは起きませんからね。
まぁとにかく、ニコラスが私に与えてくれたものは、あの家に嫁いでから、初めて触れた人の優しさでした。
その日からニコラスは、ことあるごとに人目を盗んでは私を気に掛けてくれるようになりました。

そしてシグナス様……いえ、シグナスがアレックスに私を襲うよう命じたことを知ったニコラスは、自分の身も顧みず私を侯爵家から逃がしてくれたのです。

「本当に貴方には感謝してもしきれないわ」

頭を下げた私に、彼はまた首を振ります。

「私は何もしてはおりません。寧ろ私は、あの様な状況に今日までロザリア様を置いてしまったことを悔やんでおります。私だって最初は、貴女を別邸に追いやっていた一人なのですから」

ニコラスはそう言うと、申し訳なさそうに目を伏せました。

そんな私達の様子を側で見ていたジャックさんが、もう一度私に確認しました。

「今さらこんなことを申し上げるのもどうかとは思うのですが、本当に裁判にしてよろしいのですか？　こういってはなんですが、貴方には白い結婚の証明書があります。侯爵との婚姻は無効に出来るのです。そうすれば貴方の戸籍はきれいなままです。これから先の貴方の人生を考えるなら、寧ろそうした方が幸せになれるのではないですか？　確かに慰謝料や、持参金や生活費の返金は大きなものでしょう。しかし、裁判になれば貴方は衆目に晒されることになる。もし貴方が一時の復讐心で仰っているのだとしたら、引き返すなら今ですよ？」

ジャックさんが私のために言ってくれていることは痛いほど分かりました。

でも、私に迷いはありませんでした。

私にシグナスの下へ嫁げと陛下から王命が下った時、私には既に婚約者がいました。

彼の名はメイナード。私は彼を愛していました。

立ち読みサンプルはここまで

父はそれを陛下に伝え王命の辞退を申し出てくれました。

でも、それが許されることはありませんでした。

『商売はどこへ行ってもできる』

父はそう言って私たち家族を連れて、この国を出ることまで考えてくれたのです。

ところが、我が家が王家に逆らったそのしわ寄せは、私の婚約者の家へと向かいました。彼の家にまで迷惑をかけることは出来ないと思い、私は泣く泣く王命を受け入れることを決めたのです。

それでも私は、受け入れる限りは侯爵夫人としてウィンダリア家のために尽くそう……そう心に決めてシグナスの下へと嫁ぎました。

その結果がこれです。

「いえ、例え婚姻自体が白紙に戻っても、私が王命によってウィンダリア家に嫁いだことは貴族なら誰もが知っている事実ですわ。今更取り繕うなどと思ってはおりません。それにね、ジャックさん、復讐の何がいけないのですか？」

私のこの挑むような言葉に、ジャックさんは驚いて目を見開きました。

「私はこの婚姻によって愛する人を失ったのです。それに侯爵家で熱を出して倒れた日、私は自分の命を一度は諦めました。ああ、私はこのままこの部屋で、たった一人で死んでいくんだろうなって。その時の私の絶望が分かりますか？　ねぇ、教えてください。復讐の何がいけないのですか？」

私はもう一度ジャックさんに問いかけました。

あの時の孤独を思い出すだけで、私の心の中に怒りが湧き上がります。